

生活科における教科横断的な指導を生かした表現活動の研究 —生活科と図画工作科との関連に焦点を当てて—

朝倉 万菜美

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

A Study of expression activities that utilize Cross-curricular instruction
in Living Environment Studies

-Focusing on the relationship between Life Environment Studies and Arts and Crafts-

Manami ASAKURA

(Graduate Student, Aichi University of education)

I はじめに

1. 関心の所在

生活科では、具体的な活動や体験を通して学びを進めていくことが重視されている。具体的な活動や体験を通すとは、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に働きかける学習活動のことである。この学習活動から気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現できるようにすることが挙げられている¹⁾。

筆者は、大学時代から小学校教育と幼児教育を中心に学修している。そのため、幼保小連携について興味・関心がある。そこで、遊びを中心とした幼児期の学びから教科学習中心の小学校の学びへと移行するとき、いかに段差をなくすことができるかが重要だと考える。また、幼児期の学びや育ちを理解したうえで、子どもの思いや願いを学びの出発点とすることを目指す。その時期にある子どもは、学びの場面で、製作活動や表現活動を多く行っている。

幼児教育との接続を図り、直接体験を重視した学習活動を展開することのできる生活科の授業において、表現活動の充実を図ることが重要だと考える。

2. 研究の目的と方法

本研究では、豊橋市立新川小学校教諭の桃野修

太郎教諭の実践（2023）をもとに、生活科と図画工作科における体験と表現の重要性について明らかにし、生活科における教科横断的な指導法について検討することを目的とする。中野が行った「生活科と他教科等の関連をどの程度、意識しているか」についてのアンケートで「意識している」「非常に意識している」が合わせて約70%という結果だったことから、多くの教師たちが生活科と他教科等を関連させることに意義を見出していることがわかる²⁾。それに対して、「ほとんど意識してない」「あまり意識してない」は約27%ある。否定的な見解もある中、他教科とのつながりをもたせることの意義について考えていきたい。

本研究の課題を明らかにする方法として、まず現行学習指導要領より生活科と図画工作科の教科目標に掲げられた見方・考え方を整理する。続いて、発達段階における表現活動の在り方を分析する。また、桃野実践について文献研究をもとに考察していくことで、豊かな表現活動を目指した生活科と図画工作科における教科横断的な指導について考察していく。そして、幼児教育の表現活動を小学校教育の表現活動へ生かしていく理念や考え方を明らかにしていく。

II 発達段階から考える教科横断的な指導

1. 幼児期と児童期における表現活動

発達段階における表現活動の在り方を分析するために、まず幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説を用いる。満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容(3)「生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の園児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」³⁾とされている。子どもは、幼児期から身近な環境に働きかけ、そこで感じたことや考えたことを表現している。その表現方法は様々である。そのため、特定の表現活動に偏るのではなく、子どもが思わず表現したくなるような支援と環境構成が大切なのではないかと考える。また、周りの友だちの表現を感じ取ることができるような環境を設定することが必要だと考える。筆者は、大学時代に行った保育実習において、子どもの製作途中の製作物を教室内に展示した。すると、友だちの作品に触れることで、自分と同じところや異なるところに気付くことができた。この気付きが自信や次の活動への意欲を引き出すことに繋がるのではないかと考える。そのためには、子どもの発達段階や興味・関心に応じて、表現方法を工夫することが重要である。

一方、小学校学習指導要領解説生活編第1学年及び第2学年目標(3)において、「身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。」⁴⁾と述べられている。具体的な活動や体験から学んだことを表現する場を十分に設けることで、表現することの楽しさや活動や体験の充実感を得ることができるのではないかと考える。また、「誰かに伝えたい」と思えるような表現活動を取り入れることも視野に入れたい。つまり、表現することへの相手意識が重要である。柿崎は「体験活動と言語活動は子どもの中で連動しているかのようなになる。すなわち、子どもたち

は、印象に残る栽培活動を終わると、自然に書く活動に入っていくのである。子どもたちは物語を書きたくなるのである。」⁵⁾と述べている。つまり、活動や体験と表現を切り離したものではなく、繋げることが子どもの豊かな表現を引き出すことになるのではないか。そのことを立証するために、小松は『音楽劇』の形でまとめることで、否が応でも何回も練習することになる。この過程で練習の数だけ、活動してきたことを反芻することになる。すると、さらに思いが深まっていき、この『思い』の深まりがさらなる表現の高まりにつながる。」⁶⁾と述べている。要するに、豊かな活動があつてこそ、豊かな表現に繋がる。そして、子どもが思わず表現したくなったり、他学年の子や地域の人などの他者に伝えたいと思ったりすることが幼児期と児童期における表現活動において重要だと考える。

Ⅲ 生活科と図画工作科における教育課程の動向

筆者は、愛知教育大学教職大学院に所属しており、現在豊橋市立新川小学校で実習を行っている。小学2年生のクラスが担当学年であり、生活科、図画工作科、国語科といった教科横断的な学習を行っている場面に直面することが多い。例えば、子どもたちは、生活科の校区探検を通して魚屋の魚伊さんから話を聞き、魚に対する想いを聴いた。お店の役に立ちたいという想いを具現するために図画工作科において製作活動を行っている。また、国語科の「絵を見てお話を書こう」では、オリジナルのお話づくりを通して、物語を文章で表現している。犬飼は、「子どもの思考や実生活に寄り添うための合科的指導の導入など、各教科のつながりをもたせることにより実生活と近い学習の展開を求め、子どもの実態に合わせた学習を目指す生活科の姿が見られた」⁷⁾と述べている。また、中野は、合科的・関連的な指導のメリットを「学んだ知識や技能を生かすことができる」「活動が広がり、深まる」「子どもの意欲・関心が高まる」「子どもの発達段階に適合している」⁸⁾などと分類している。これらの示唆を生活科に置き換えて

言及すると、子どもの思いや願いを学びの出発点とし、各教科とのつながりをもたせながら学習を進めることで、自立し生活を豊かにしていくという教科目標に迫ることができるであろう。そこで、生活科と図画工作科における見方・考え方を整理する。

まずは、生活科について『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説生活編』において、生活科の見方・考え方は下記の通り整理された⁹⁾。

生活科における見方・考え方は、身近な生活に関わる見方・考え方であり、それは、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするものであると考えられる。

生活科における身近な生活に関わる見方とは、身近な生活を捉える視点であり、身近な生活における人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点である¹⁰⁾と示している。また、「自分との関わりによって対象を捉える」¹¹⁾ ことであるとされている。そして、身近な生活に関わる考え方とは、自分の生活において思いや願いを実現していくという学習過程にあり、自分自身や自分の生活について考えていくことである¹²⁾と示している。生活科においては、自分との関わりによって、対象を捉え、対象との関わりを通して自分の生活に還していくことが大切である。そのため、子どもの興味・関心から子ども自身が問いを生み、活動に没頭することで、自立し生活を豊かにしていくと考える。牛山は、「私は子どもの内に動く関心のありようを確かめていた。」¹³⁾と述べている。教師は、子どもが生活の中で、関心を持っていることを学びに繋げ、その学びの場を保証することが求められるだろう。

中央教育審議会は、幼児教育における「見方・考え方」は、「幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤した

り、思い巡らしたりすることである」¹⁴⁾と述べている。遊びを中心とした幼児期において、子どもは生活科における見方・考え方を身に付けている。子どもが既にもっている見方・考え方を生活科の授業を通して、さらに確かなものにしていきたい。また、このような見方・考え方を生かし、子どもが思いや願いの実現に向けて、充実した表現活動につなげていくことが大切である。

つぎに、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説図画工作編』において、図画工作科の見方・考え方は下記の通り整理された¹⁵⁾。また、図画工作科の第 1 学年及び第 2 学年の教科目標についても示す。

造形的な見方・考え方とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」であると考えられる。

学年の目標：第 1 学年及び第 2 学年

知識及び技能	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに、手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して創造的につくったり表したりすることができるようにする。
思考力、判断力、表現力等	造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想をしたり、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。

「感性や想像力を働かせ」とは、表現及び鑑賞の活動において、子どもが感性や想像力を十分に働かせることを一層重視し、それを明確にするためにと示している。また、「対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え」とは、材料や作品、出来事などを、形や色などの視点で捉えるこ

とである。そして、「造形的な見方・考え方とは、子供が生涯にわたって生活や社会の中の色や形などと豊かに関わり、豊かに生きていくために必要な資質・能力の基盤となるものなのである」¹⁶⁾とされている。図画工作科において、自分と対象や事象との関わりを深めることが自分にとっての意味や価値をつくり出すものであると考える。さらに、手や体全体の感覚を働かせることなどの五感を使うことは、生活科に限らず図画工作科においても重要な点だと言うことが明らかになった。

また、低学年の目標において知識及び技能について、「材料や用具を使い、表し方などを工夫して創造的につくったり表したりすることができるようにする。」と掲げられている。これは、生活科の内容(6)「自然や物を使った遊び」に関連してくるだろう。身の回りにあるものが学習対象になっているのである。

IV 今年度の授業実践と考察

筆者は、今年度の実習で2年生活科「おもちゃまつりへようこそ」の実践を行った。単元の流れを資料1に示す。

【資料1】単元の流れ

時数	主な学習活動
1	身近な廃材を使い、おもちゃをつくる。
2	おもちゃをつくる班を決める。
3-8	班ごとにおもちゃをつくる。
9	おもちゃまつりに必要なお金をつくる。
10	招待状を用意する。
11-12	学年でプレおもちゃまつりを行う。また、改善をする。
13	1年生を招待し、おもちゃまつりを行う。
14	片付け、ふりかえりを行う。

今回、この実践を行い、子どもの「作りたい」「もっとこうしたい」という思いや願いが活動の発展に深く結びついていることがわかった。第1時では、身近な廃材を自由に選び取ることができ

る場を設定した。子どもたちは、その廃材から自分の作りたいおもちゃを作る姿が見られた。そこで、ボウリングを作っていた子どもが、遠くでボウリングを作っている友だちに「ボウリングを作っているなら一緒に作ろうよ。」と声を掛ける姿があった。教師が「同じものを作っている子とグループになって活動しよう。」などと声を掛けなくても、子どもが周りを見て、自分自身の活動に必要な人を集めることができることを学んだ。これは、図画工作科のプチプチお魚づくりで、同じ生き物を作る仲間と共に製作をすることで、より良い作品を作ることができたという達成感から得られた学びだと理解する。

おもちゃづくりが進む中で、「誰のためにおもちゃをつくる？」といった相手意識を持った言動が多く見られるようになった。ルールや値段を書いた看板づくりでは、「1年生が読めるように」と言いながら、漢字にはふりがなを書く姿が見られた。また、「1年生が取りやすいように」と作ったおもちゃを並べる時に、並べ方を工夫していた。1年生に伝えるという相手の存在を意識することが子どもたちの活動の原動力に繋がったと考える。さらに、おもちゃまつり実行委員を決める際、立候補した子どもたちの発言からも相手を意識した言葉が多く出てきた。子どもたちの発言を資料2に示す。

【資料2】実行委員を決める際の発言場面

- C1：1年生が楽しかった、いい思い出だなと思えるようにしたい。
- C2：2年生になったらおもちゃづくりをしたいと思います。
- C3：こんなことできるのだと希望を持てるようにしたい。
- C4：来年やりたいなと思ってもらえるおもちゃまつりにしたい。

さらに、今回実践を行う上で、今までの図画工作科などの授業における表現活動の充実感などが子どもたちの活動の意欲を支えていることがわかった。子ども自身の中にある「表現したい」という思いがおもちゃづくりにも生かされていると感

じた。各教科で身に付けた資質・能力を十分に発揮することができるよう、生活科を核として、授業を構成していく必要があると考える。

V 桃野実践からみる生活科と図工の教科横断的な指導の考察

本研究で取り上げる桃野は、「作品による想いの具現を通して、地域の人と関わることで作品製作をしていくことに、より価値を感じるとともに、今後の学習においても地域に愛着をもち生活してほしい」¹⁷⁾ という願いを持ち、図画工作科を核として、教科横断的な指導を行っている。2023 年に行った図画工作科の実践において、「地域の方と触れ合うなかで人の役に立ちたいと考え、形や色に目を向けて製作に取り組んでいけば、より立体造形に対して見方や考え方を広げていく子になっていく」¹⁸⁾ と考えている。これを踏まえた今年度の実践が「いらっしやい！美味しくて新鮮なお魚屋さん～みんなにっこりプチプチお魚～」である。本章では、この桃野実践（2023）を手がかりに生活科との教科横断的な指導の可能性を見出していきたい。

1. 追究力や原動力を育む子どもの姿

桃野実践（2023）は、気泡緩衝材での立体的なお魚づくりを通して、気泡緩衝材を切ったり、貼ったりすることで形や色のよさに気づき、工夫して立体的に表現すること、自分の想いをどのように表現するかを考えて表現すること、材料に興味をもち、すすんで仲間と関わることをねらっている¹⁹⁾。

まず、桃野は学びの出発点が子どもであることを重視している。子どもたちは、1 学期での造形パラダイスの作品づくりにおいて、地域の方の想いに触れ、形を意識しながら木端を積み重ねる作品づくりを行った。また、学校生活の中で、子どもたちはクジラや魚などの話をしていた。そこで、子どもの興味・関心が海の生き物や魚が好きであるということを教師が見取った。そのため、2 学期の校区探検では、校区内の鮮魚店を訪れた。そして、校区探検を通して、魚屋魚伊さんから魚に対する想い「魚が好きになってほしい」を聴くこ

とができた。魚伊さんという地域の人に関わっていることが図画工作科において相手意識へと繋がっていると考える。表現するためには、伝える相手意識を持つことが、生活科にとっての「人」という学習対象になる。この実践から教師が子どもの興味・関心を見取り、題材にすることの重要性を感じた。子どもも理解をしたうえで、学びの出発点が子どもであることが学びと生活が繋がる、生きた学びになると考える。

また、鮮魚店内のショーケースには、切り身になった状態の商品が多く並んでいる。子どもは、目の前にはない調理前の魚について考えたり、調べたりしていく必要がある。魚自体の色や形を知る必要感が子どもの「もっとこうしたい」という追究力や原動力につながったと考える。

そして、「魚が好きになってほしい」という魚伊さんの想いを胸に活動する姿が見られた。資料 3 は、試作を作ってみて思ったことについての発言の場面である。

【資料 3】10 月 11 日の発言場面

C1：本物みたいにすることが必要だよ。

T1：どうしたら本物みたいに見えるかな。

C2：色や形をしっかりとしないといけないよ。

C3：しっかりと調べて、足の向きがどうなっているかもよく見たい。

魚を好きになってもらうためには「本物みたいにする必要がある」という意見が多く出た。そして、本物みたいとはどうするべきかを話し合った。魚伊さんの想いを聴いているからこそ、本物みたいにすることは、美味しさにつながるから大切だという意見が出たと考える。子どもたちが地域の方の想いに触れることが、活動の原動力になり、「お店の役に立つためにはどうしたらよいか」という問いを持ち続けることになったと考える。そして、タブレットなどでさらに調べていきたいと前向きな気持ちを持つことになったと考える。さらに、子どもの追究力や原動力を育むために、教師の発問の工夫があることがわかる。資料 4 は、追究を見直すかわり合いの場での発言である。

【資料 4】10 月 30 日の発言場面

T1：自分にとってもっとこうしていかないといけないなということはあるかな。

C1：色が一色しかない。

C2：足の本数が足りない。

C3：ひれが 2 本で難しい、困っているよ。

T2：アイデアはあるかな。

C4：色のシートの貼り方に気を付けるといいよ。

C5：～さんの固くするアイデアを使うとできそうだよ。

このように子どもの困り感を全体で共有することで、自分の困っていることに対してのアイデアを友だちからもらうことができるとわかった。また、作品を作り直す前に、直す視点を定めておくことで、追究するポイントを明らかにした活動に取り組むことができるだろう。そして、同じ生き物をつくる子どもがグループになっているため、自然と周りの友だちのつくっている様子や工夫を見つけていることが資料 4 の発言場面などから見えてきた。

2. 授業場面を支える教師の支援

(1) 作り直しやすい教材（材料）の選定

この実践では、気泡緩衝材や布テープ、カラーセロファンを使用していた。気泡緩衝材は、形を自由自在に操ることができるため、形や大きさを意識してつくりやすいと感じた。また、非常に軽いため、大きくしていても子どもが自分の手で持ち運びができる。そのため、作業場に制限なく活動が展開できると考える。また、写真 1「プチプチおさかなのせいそくするけんきゅうじょ」のように、つくったプチプチお魚を展示することも容易であろう。布テープは、貼るだけではなく、テープの上からペンで色をつけることが可能である。さらに、カラーセロファンは、重ねて色を作っていくことができる。ウニをつくっている子どもは緑や赤など複数色使っている姿も多く見られた。

このように、教材の特徴を押さえ、選定することで色や形に意識を向けながら作品をつくる姿が多く見られた。また、気泡緩衝材を切ったり、貼

ったりすることで形や色のよさに気付き、工夫して立体的に表現する姿が見られた。細部を表現する図工において重要なことだと考える。生活科においては、「材」を検討することがとても重要になる。子どもの思いや願いを実現するために、必要な「材」を子どもの身近なものからつなげることが実践を構想するうえで大切な視点になってくるだろう。また、子どもの活動が進んでいく中で、必要な「材」を増やしていくことも大切である。

【写真 1】子どもたちの作品掲示



(2) 学びと生活をつなぐ環境構成

桃野学級には、子どもの思考をつなぐ掲示で、教室の環境を構成している。写真 2 のように、毎時間話し合ったことを模造紙にまとめることで、学習段階ごとの子どもの思考の変容などを読み取ることができる。また、いつでも前の学習に戻ることができるため、題材を貫く問いを持ち続けることにも有効に働く。

【写真 2】毎時間のまとめ



そして、写真 3 のように学びの時間と日常生活のつながり、世界観が作りあげられている。壁面をブルーシートで覆ったり、画用紙などで作った魚を貼ったりすることで、単元を通していつでも海の生き物と繋がることができていると感じた。

また、子どもの手の届くところに魚の絵本や図鑑が置いてあるため、子どもが好きなタイミングで、いつでも魚の特徴や生態を追究ができると考える。学びの時間と日常生活が切り離されたものではなく、繋がっていることがより深く学んでいくことに有効に働くのではないかと捉えることができる。

【写真 3】教室環境



3. 生活科と図画工作科との教科横断的な指導

本研究で取り上げた桃野実践から豊かな表現活動を目指した生活科と図画工作科における教科横断的な指導について考察していく。

桃野実践の中で、「美味しくて新鮮な魚の作品をつくってお店の役に立ちたいな」という問いをもった子どもたちは、お店で売られている魚を具現するために魚の体の形や色を考えて製作に没頭する姿が見られた。子どもたちは、製作活動を繰り返し行う中で、魚の細部について考える姿が見られた。このことについて、牛山は、「相手との関係のあり方が、そのものやことへの感じ方、見え方、関わり方の質を規定するということ」²⁰⁾と述べている。子どもと対象との関係が昇華した瞬間こそ、子どもが学びに没頭している時だと考える。対象との関係が変わっていくことは容易なことではない。また、短時間で変わることもないだろう。

桃野は、「シールを活用して仲間からの他者評価を受けることにより、子どもたちは自分の表現のよさや足りなさを自覚したり、仲間の製作方法の違いに気づいたりしていった。」²¹⁾と述べている。繰り返し活動を行い、時に友だちとの関わりを持ちながら十分な活動や体験を行うことが重要だと捉える。そこで、生活科と図画工作科どちら

においても、子どもが十分に活動できる時間と場を設定したい。対象と深く関わるのが子どもの思いや願いの実現には不可欠である。牛山は、「教師は、子どもと同じ切な『当事者』でなければならない。教師がそこに座り込むほどに、子どもも座り込む。そうすると、ものごとの『有り様』が見えてくる。」²²⁾と述べている。子どもの興味・関心に目を向け、共に考えることができ、没頭している、学んでいる子どもを待つことのできる教師であることは、子どもの資質・能力の向上には不可欠である。

本田は、「体験を繰り返し、その体験に没頭すること」が大切であるということや「体験を振り返って考えその時感じた驚きや面白さをもう一度味わうこと」⁽²³⁾が必要であると述べている。

本田は、地域の人・もの・ことのすばらしさを自分とのかかわりでたっぷりと味わわせるために、

「心と体で感じる体験」と「体験と言葉を通して味わい直す言語活動」を単元に組み込んで、町探検の実践を行った。単元全体を五つの小単元で構成し、「関心もつ→知る→調べて分かる・気付く・働きかける」と少しずつねらいを高めた体験を4回繰り返し行った。桃野の実践においても、追究を見直す段階では、表現を見直せるよう、表現について語り合う場を設け、自分の作品をより良いものにするには、どの考えを試してみると良いかを選び、学級全体で試す場を設けていた。生活科においては、継続的に対象と関わること、図画工作科では、一人で試行錯誤したり友だちと関わったりしながら作品作りを進めることなど対象への向き合い方は多様である。そこで、どのような活動においても、活動から得られた気付きや思いを明らかにするために表現することが肝要である。このように表現する過程を大切にすることで、各教科の学びに留まらず、教科を横断する学びの基礎が培われていくと考える。以上のことから、子どもが対象に自ら働きかけ、心を寄せ、繰り返し体験できる場を設けることで、体験が豊かな表現活動につながるだろう。

VI おわりに

本研究では、生活科における教科横断的な指導を生かした表現活動について、生活科と図画工作科の見方・考え方を整理した上で、授業観察や文献を中心に明らかにした。

子どもが思わず「表現したい」「誰かに伝えたい」と思えるような表現活動を行うためには、子どもの思いが深まる十分な活動や体験が保証される必要がある。また、繰り返し対象と関わる場と時間を設けるなどの単元構成の工夫も必要だとわかった。そして、子どもの興味・関心が学びの出発点となることで、子どもの追究力や原動力を育むことも本研究から明らかになった。

本研究の課題は、生活科と図画工作科との関連に焦点を当てた教科横断的な指導について十分な文献量を取り上げることができなかったことである。今後は、生活科・図画工作科・子どもの発達という単元開発の視点を基に、授業を構想していきたい。子どもの言葉から子どもの興味・関心を引き出し、授業実践に生かしていきたい。また、表現活動を繰り返し行うことで、子どもがどのような思いや願いをもち、対象と関わり続けているかということを見取っていく必要がある。

【註】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」2017年 p.10
- 2) 中野真志「生活科の合科的・関連的な指導についての研究-愛知県におけるアンケート調査の分析と考察を通して-」2004年 p.13
- 3) 文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」2017年 p.300
- 4) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」2017年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320026.htm (2024年3月1日現在)
- 5) 柿崎和子「『体験活動』と『言語活動』の連動による学び-『種から植物を育てる活動』を振り返る『物語作り』の学びの可能性-」生活科・総合的学習研究 2013年 p.167
- 6) 小松葉子「令和5年度後期に行われた教材分析と授業実践開発 C（生活：自然）講義にて

配布された資料」

- 7) 犬飼紗貴子「生活科学習における合科的な指導の在り方とその単元開発に関する研究」2020年 p.3
- 8) 中野真志 前掲書2) p.12
- 9) 文部科学省 前掲書1) pp.10-11
- 10) 文部科学省 前掲書1) p.11
- 11) 東洋館出版社「平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理生活」東洋館出版社 2017年 p.62
- 12) 文部科学省 前掲書1) p.11
- 13) 牛山栄世「学びのゆくえ」岩波書店 2001年 p.38
- 14) 中央審議会「幼児教育部会とりまとめ」2016年
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/siryo/attach/1373429.htm (2024年3月10日現在)
- 15) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編」2017年 p.11.18
- 16) 東洋館出版社「平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理図画工作」東洋館出版社 2017年 p.83
- 17) 桃野修太郎「研究2年次のまとめ」
- 18) 桃野修太郎「令和5年度11ブロック合同現研」2023年 p.16
- 19) 桃野修太郎（2023）令和5年度10月30日授業検討会
- 20) 牛山栄世 前掲書13) p.25
- 21) 桃野修太郎 前掲書17)
- 22) 牛山栄世 前掲書13) p.119
- 23) 本田泉「感じる心を育てる - 体験と言語活動の繰り返しで気付きを実感し自立していく生活科学習」生活科・総合の実践ブックレット v 第9号 2015年 pp.52-53